

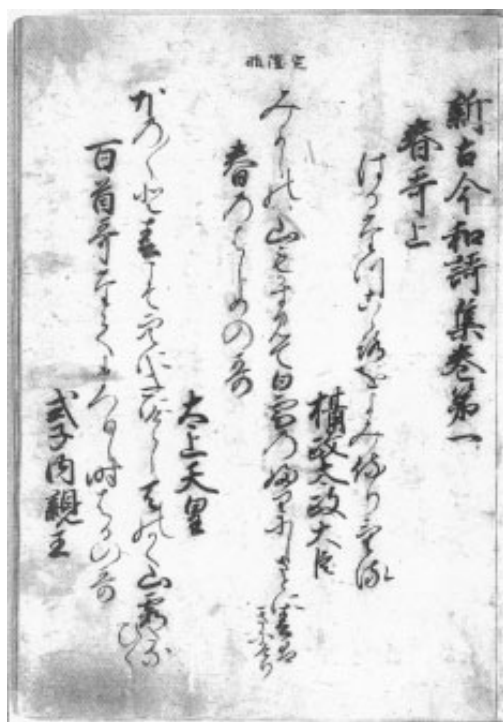
『新古今和歌集』 寿本の書誌解題及び考察

久保木 秀 夫

『新編国歌大観』底本

京都女子大学図書館谷山文庫に収蔵される『新古今和歌集』の一
古写本 (090/Ta88/617、図版1)、いわゆる「ことぶきほん寿本」は、何より
『新編国歌大観』における同集の校訂本文の底本という点で知られて
おり、その意味で今日最も活用されている重要伝本であるとも言え
よう。発見者・旧蔵者たる谷山茂によって初めて紹介されたこの寿
本自体について、しかしでは文献資料的価値のすべてがすでに説明
し尽くされ、解明し尽くされているかという点、そういうわけでも

図版1



実はなかった。このたび寿本を実地にかつ丹念に調査する機会を頂戴し、結果述べるべき諸点がなお残されていると判断されたため、以下、同本の詳細な書誌解題と考察とを行っていく。

装訂・表紙・見返し等

寿本は列帖装二帖。上帖はオモテ表紙が縦二十四・八cm×横十七・三cm、本文料紙は縦二十四・七cm×横十六・八cm。下帖はオモテ表紙が縦二十五・〇cm×横十七・三cm、本文料紙は縦二十四・八cm×横十六・八cm。本文料紙は上下帖とも左端が少々裁ち落とされている（あるいは天地も若干か）。桐箱入り、箱書等なし。上下帖とも墨付き丁の一丁目オモテ面右上に「谷山／蔵書」の朱方印、同中央下に「京都女子大学図書館蔵書／第456815号／平成3年3月7日」の受入楕円印あり（印は黒インク・数字は青インク）。

表紙は後補。縹色地、中央に金糸で大きく「壽」字、ほか茶・黄・緑・水色などの糸で唐草唐花・「卍」字・散華などの文様を全面に織り出した裂表紙。「寿本」と通称される所以である。なお谷山は、

この「寿」という字が何を意味するか明らかでないが、その左下に小さく卍を織り出しているところを見ると、それは本書を旧蔵していた寺院などに関係のある文字ではあるまいかと思う。

とするが、古裂でしばしば見かける文様で、吉祥として織り出されたものなのだろう。

左肩に後補の金地布製の題簽貼付。書名等一切無記載、虫損・破損あり、その穴を通して、下にやや金色味のある具引装飾に類した料紙が重ね貼りされているのが視認される。

見返しは斐紙。金の切箔・揉み箔・砂子散らし、かつ金泥で草等を描く。この見返しも後補ながら、上下帖の前後

の見返しのいずれでも、その隣りの遊紙と虫損がほぼ重なっている。次述のように寿本はかなりの虫損被害を蒙っているが、少なくとも見返し・遊紙あたりと連なっているそれらについては、見返しが後補された江戸時代以降に生じたものということになる。また合計四面分の見返しと、それに接する後補の各表紙とでは、見返しのほうの特にノド側を除いた三辺の寸法が、程度の差はあれずれていたり不揃いであったりと、表紙と現状馴染んでいない。その点上下帖の現在の表紙は、見返しの後補とは同時期ではなく、これも後述するように、寿本がさらに綴じ直された比較的近年の段階で、新たに付け足されたものであったと推察される。

料紙構成・状態等

本文料紙。上帖は厚手の楮紙にやや薄手の楮紙が一部混在、下帖は逆で、やや薄手の楮紙に厚手の楮紙が一部混在。上下帖ともノド部分を中心に全丁にわたり虫損被害を蒙っている。特に上帖は甚大であり、ノドから横方向に広がった傷が最長十一cm近くにまで及んでいる。それらの虫損部分は薄様で補修されているものの、糊が変色してやや黄ばんでおり、何より文字が欠損してしまっているところの少ないのが残念である。またとりわけ被害の大きいノドのあたりでは、巧みに墨付き部分を避けながら薄様が貼付されており、補修技術の高さに驚かされるが、さすがにすべては避け切れず、墨付き部分に薄様が重ね合わされているところもあり、結果としてその部分の本文は墨色が薄まっているかのように見える状態となっている。かつ同じ補修作業に伴ったことであろうが、付近の文字に墨の滲みや掠れが生じてもいる。ただしこうした問題箇所はいずれも解読まったく不可能というほどではなくて、ほぼすべてにおいて、残画等からどのような文字があったかという推定はできそうである。

一方、特に補修が為されていない墨付き丁の一部において、あたかも水を付けた刷毛でなぞったかのような、数行にわたったの墨の掠れが生じてもいる。また見開き二面にわたり、全体的に掠れが目立つ部分があるかと思えば、その直後の見開き二面では、墨色実に濃く鮮明といった部分などもある。ほか数行単位・数文字単位でのみ掠れている部分などもある。一括りや数丁といったまとまりではなく、とある見開き部分に限ってとか、一面の中の一部に限ってとかという具合で、こうした現象が生じているのはなぜなのか、一体どのような説明が可能であるのか、何とも不思議で釈然としないが、ともあれ状態に関わる情報として書き添えておく。

また上下帖とも、次述する各括りのそれぞれ最初の面と最後の面との荒れが強く、墨の掠れも散見される。おそらくは伝来途上の短くない期間、装訂が解かれて各括り単体となった上、保存的に好ましくない環境に置かれていた、もつと言えば放置に近い状態にあったがために、生じた荒れのようにみられる。にも関わらずひとつの括りも一枚の料紙も失われず、上下帖とも完存の状態にきちんと復元されたのは、驚くほどの幸運だったと思えてならない。現状の朱色の綴じ糸も当然ながら後補にして、かなり新しめのものである。ほか上下帖とも、重ねた各括りの背の全体に別紙薄様を糊付けして補強してある。これも綴じ直しと同時期の補修であろう。総じて現状のようになったのは、近代以降の補修の結果と推察される。

ちなみに前述虫損補修もそれと同時期かと当初は判断していたが、谷山の記すところ、寿本の「(ママ)到るところに虫損の痕があらり、「うっかり頁をめくると、虫損でかこまれた部分が脱落してしまいそうなどころさえがあら」ったという。しかし実地に取り扱ってみてもそのような危惧を抱くことは一度もなく、補修は谷山紹介後しばらくの時を経てから為されたものと推察される。谷山論に掲載される寿本の図版において、虫損部分が黒く潰れて写っているのも、その段階では未補修状態だったことの顕れであろう。

各括り

上帖は全八括り。第一括りは十枚重ねの二十丁、うち最初の二丁は前表紙の芯紙、よって本文料紙としては十九丁。第二括りは八枚重ねの十六丁、第三括りは九枚重ねの十八丁、第四括りは十枚重ねの二十丁、第五く七括りはそれぞれ九枚重ねの十八丁、第八括りは八枚重ねの十八丁。この第八括りの最終丁は、第一括り、ひいては列帖装の通例とは異なつて、ウラ表紙の芯紙とはされず、代わりに別種の薄手の楮紙が、ウラ表紙とウラ見返しとの間に挿入されている。かつこの別紙は右端に一・〇cm近くの幅を持たされ、それが第七括りと第八括りとの境目に差し込まれた上、第八括り側に糊付け固定されている。なお同じ箇所、これも列帖装の通例としてウラ表紙の端も差し込まれている。ちなみにオモテ表紙の端でも同様に、第一く二括りの境目に差し込まれ、さらに糊付けされてもいるのだが、ウラ表紙の端のほうではその点だけは異なつて、糊付けされないまま浮いた状態となっている。よってそれを捲ることができ、結果後補の芯紙が糊付けされているのを確認できたわけである。また芯紙とはされなかった第八括り最終丁のウラ面の四周には糊代痕がはっきりと見られる。元ウラ見返しとしてウラ表紙に直接貼付されていた名残りだろうと推察される。

下帖も全八括り。各括りとも九枚重ねの十八丁。うち第一括りでは最初の二丁がオモテ表紙の芯紙、第八括りでは終わり二丁がウラ表紙の芯紙とされており、よって本文料紙としては前者が十七丁、後者が十六丁となる。

括りに関してもうひとつ述べておくべきは、各括りの第二丁オモテ面ノド側上方に、その括りが列帖装構成上の何番目に該当するかという漢字の通し番号が記されていることである。ただし現状視認できるのは、上帖では「二」「三」

「四」のみで、第一括りは該当箇所がオモテ表紙と前見返しとに挟み込まれていて確認不可、第五～七括りは虫損・破損によって欠落、第八括りは前述した別紙薄様紙貼付のために確認不可となっている。下帖では「二」「三」「四」「五」（虫損・補修のため残画）のみで、第一・六～七括りは上帖のそれらと同じ理由により、また第八括りはウラ表紙の左端が（上帖と異なり）糊付けされているため、やはり確認不可となっている。

以上の中でいささかの不審を覚えるのは、列帖装では多くの場合、いずれの括りも重ねる料紙の枚数は大体同じで、実際寿本の下帖でも全八括りのいずれもが九枚重ねの十八丁となっていることに対して、上帖ではそれが前掲のとおり一定しておらず、十枚重ね・九枚重ね・八枚重ねが混在していることである。こうした場合、まずは最も多い枚数を基準として料紙の脱落を疑うべきところであるが（換言すれば、このように点検していくことで、この括りには料紙の脱落があるのではないか、という可能性に気づきやすくなるのであるが）、本文としてはそのいずれであっても連続していて完存している。よって原装時から各括りの枚数が区々だったと判断するほかないのであるが、前述のとおり下帖がきれいに揃っているだけに、なお若干の違和感が残ってしまう。ただ必ずそうでなければならぬ道理でもないため、本来そういうものだったとみておくしかない。

ともあれこれらをまとめれば、上帖は本文料紙が全百四十三丁、うち前遊紙一丁、墨付き百四十一丁、後遊紙一丁。下帖が全百四十一丁、うち前遊紙一丁、墨付き百三十七丁、後遊紙三丁、ということになる。これに関わりひとつ面白く思われるのは、下帖の墨付き四十七丁目ウラ面と四十八丁目オモテ目という見開き二面の、それぞれ地に沿った余白部分に、縦一・五cm×横二・〇～二・三cm程の薄様小紙片が貼付されており、「下96」「下97」と鉛筆で書かれているということである。そこで遊紙を含めて最初の丁から数えていくと、果たして四十七ウは九十六面目に、四十八オは九十七面目に該当していた。これと同種のものとしては、同じ下帖の後遊紙一丁目オモテ面のやはり下方に「下275」

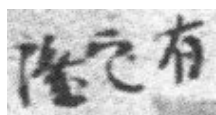
と貼付されている紙片と、紙片自体はないものの、かつては紙片が貼付されていたであろう糊付痕とともに（以下煩瑣になるため丁数の情報は省略）「下104」「下173」「下191」「下206」「下208」「下209」「下217」「下220」「下253」「下258」「下265」「下266」「下269」「下273」「下279」という、鉛筆の墨痕とおぼしきものとが挙げられる。またその眼で下帖の料紙を再点検していくと、各丁の各面のほぼすべての下方に、小紙片が貼付されていた糊付痕があることもわかった。上帖ではそこまで顕著ではないものの、やはり同様の糊付痕が多く、面に認められた。加えてかすかに「上119」「上281」と判読できる墨痕もあった。さらに下帖では「下187」や「下191」が左右反転の鏡文字として視認される事例があり（ちなみに例えば後者は料紙としては百九十五面目に該当）、これは一旦百九十一面目から剥がれた（剥がされた）薄様がオモテウラ逆さの状態で百九十五面目に偶々誤挿入された結果、現状のようないわゆる墨映が生じた、ということだろう。ただしこの墨映の場合のように、鉛筆で書かれた文字面の側が本文料紙に付着したというのであれば、鉛筆の墨でもこのような墨痕が生じ得ようが、これ以外のすべての事例のように、薄様に書かれた鉛筆の文字が、紙片のウラ側をも通過してその下の本文料紙にも墨痕を留めることがあるのかどうか、やや首を傾げてしまいもあるが、現に視認される以上はあったということとなるだろうか。

微細な点に立ち入りすぎたきらいもあるが、要するにこれらはおそらく谷山によって為された、面数の確認や備忘のための付箋とみられる。最終的に用済みになったため剥がしたものの、剥がし損なったり、図らずも墨痕や墨映が残ったりしてしまったということだろう。論者などは架蔵の近世近代の写本や版本に対してであっても、何かを書き加えたり貼ったりなどではできないだけに、このあたり、対象が相当な古写本だろうと、いにしえ人たちが書き入れや貼り紙等をしていたのとおそらくは近い感覚で、谷山がそれと同様のことを行なっていたということに——なお同時代なり前時代なりの研究者にも類例ままあるようである——、ある種の畏敬や憧憬の念をも覚えたのだった。

本文・撰者名注記・傍書の筆蹟

寿本はその筆蹟・筆致・料紙の状態等からして、室町時代後期頃の書写とみられる。本行本文は上下帖とも同一筆者の一筆であろう。また後述のように寿本は、比較的近年になって存在が明らかとなり、複製本⁽²⁾次いで影印本⁽³⁾が刊行され、最近の校注テキスト類で底本に採用されることが多くなってきた、国立歴史民俗博物館蔵・伝冷泉為相筆本（以下「為相本」）と相当に近い関係にある。が、一方で為相本にはない撰者名注記が全巻にわたって施されている。冒頭のみ「定」「隆」「雅」などと記すものの、すぐに「六」「卜」「牙」といった略字を用いていく種類のものである。為相本になくて寿本にあるのはなぜかというのも実は大きな問題なのだが、ひとまずは措く。図版2のようなその撰者名注記と作者名とを比較してみると、前者は文字が小さくやや潰れ気味で難しいところもあるものの、実地に筆蹟や墨色などを熟視した結果としては、これら寿本の撰者名注記と本行本文とはおそらく同筆のようにみられた。

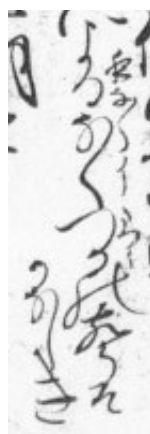
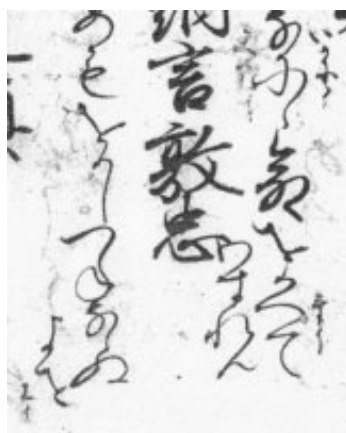
図版2



また寿本には、図版3のような他本注記が散見される。これらは上帖に少なく下帖に多く、かつ下帖のそれは実質異同が非常に目立つ。上下帖で校合の精粗があったということではなく、校合本とされたところある一本が、あるいは巻

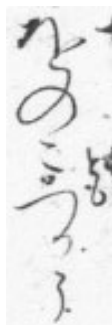
十までと巻十一からとで取り合わせ本文になっていた、その顕れではないかと思われる。ともあれこうした他本注記の筆蹟は、本行本文のそれとは同筆のようにも別筆のようにもみえてしまう。論者としては別筆の可能性がいささか高い感触を抱いているが、いずれであるかの確言は今は保留としておきたい。

図版 3



それと本行本文に関しては、**図版 4**のように、行間に細字で書き加えたり、補入記号を用いたり、ミセケチ訂正を施したり、「**〽歟**」として疑義を呈したりしている部分も散見されるが、それらはいずれも本行本文と同筆のようにみられる。つまりは親本からの転写時に、当初誤写誤脱等してしまった本文を、筆者自身が気づいて同じ親本に基づき修訂したものと捉えてよさそうだ、ということである。その見方が妥当であるならば、今後寿本を底本としてあらためて本文整理（翻刻ではない、念のため）していく際には、それらについては本行本文文化させてよいのだろうと考えている。

図版 4



奥書

さて寿本では本文が、仮名序↓巻一〜十（ここまで上帖）・巻十一〜二十↓真名序・本奥書↓「後出哥」（ここまで下帖）と続いていく。うち下帖の真名序に続く百三十六才には、**図版5**のような本奥書がある（私に読点を施す、以下同）。

図版 5



A 本云 承元三年六月十九日、書之、

B 同七月廿二日、依重 勅定、被改直之、

C 以定家卿自筆本書写之、
九条左大臣女所持之

本草子、料紙、鳥子色紙、

表紙画図、式子内親王筆云々、

D 元応元年潤七月十六日、不違文字書写之、

北山入道相国家本也、 E 同十八日、校合畢、

また谷山が指摘するとおり、「遺憾ながら今はその文字が削り去られて、肉眼では判読しがたいのであるが」、直後の百三十六ウの終わり三行目あたりには「さらに一行の奥書と署名とが加えられていた」痕跡がある。その部分をよく熟視するに、

F 〔 〕三 〔 〕六月廿一日 〔 〕

と読めなくもないようであるが、これ以上は現状不明とせざるを得ない。

ともあれ本奥書のうちABでは、承元三年（一二〇九）六月十九日に『新古今集』の一本が書写されたものの、同年七月二十二日に後鳥羽院からの重ねての「勅定」によって、さらに本文が直し改められたことが示されている。もつともこのABだけだと、これらが誰のどのような伝本にあった奥書なのかは判然としないが、続くCに「定家卿自筆本」を親本として転写本を作成したと記されているため、ABを持った承元三年六月奥書本は、『新古今集』撰者の一人として撰集作業を主導した定家自身が、直接書写に携わっていた伝本だったと推断される⁽⁴⁾。もつとも「自筆」とあつても全文が定家一筆だったとは限らず、いわゆる「定家監督書写本」のような寄り合い書きだった可能性も十分あるが、ここでは便宜上「定家筆本」と呼んでいく。

するとCにおいて続けて述べられる「本草子」もまた文脈的に、自ずとその定家筆本を指しているようから、定家筆本の料紙は「鳥子色紙」＝斐紙の染め紙にして、表紙には式子内親王によると伝えられる「画図」までもが描かれていたことになる。これは国文学研究資料館懷風弄月文庫蔵の伝飛鳥井雅康筆本（九二―三二―一―二）に、

太秦本云、

弘長二年十月廿五日、以証本^{皇親校合畢}、彼^{マア}上下二帖、表紙有四季絵、裏書無之、料紙白色紙、序如常被書之、奥書云、

承久^(ママ)三年六月十九日書之、同七月廿二日、依重勅定被改直之、

のように引かれる「太秦本」の識語中、校合に用いた「証本^{祖父}」が「表紙有四季絵」「料紙白色紙」だったとし、しかもABと一致する本奥書(「承久」は「承元」の誤写であろう)をも持っていたとする記載などともよく符号する。よって両者の関係性についても今後追求していかなばなるまいが、それは別の機会に取り組みたく、今問題としている寿本の祖本たる定家筆本は、如上の情報を信じるならば、関与した人物といい本文といい装訂といい、相当に権威を帯びた豪華な伝本だったとみられる。

かつ当時のその所蔵者が「九条左大臣女」―定家孫・為家女の後嵯峨院大納言典侍を母とする九条(二条)道良女でもあったというので、伝来としてもこの上ない。そしてDに拠れば、元応元年(一三一九)閏七月十六日に、C奥書を親本として一文字も違えずに転写したといい、Eに拠れば同月十八日に「校合」(書写後の点検)が為されたという。そのDE奥書をさらに直接に、もしくは最低一本を介して間接に転写したのが寿本ということになる。

なおDの中に「北山入道相国家本也」という文言がある。これはCとEの文脈的に、九条左大臣女蔵の定家筆本を転写したC奥書本(＝D奥書本の親本)が、Dの時点で「北山入道相国家」蔵となっていたように理解されよう。この「北山入道相国」について谷山は西園寺実氏とするが、通常この称が指すのは西園寺実兼であり、ここでもそうとみるべきである。

ついでに述べると谷山はまた「定家自筆本は定家―為家―九条左大臣女という経路を経て、九条左大臣女の伝領するところとなっていたのであり、その間に何の不思議も生じない」とする一方で、「定家は九条家の家人であったので、その自筆本が九条家に贈られるということも当然ありえたであろう」とし、宮内庁書陵部御所本中のいわゆる合点本(四〇五―一〇二、その親本が冷泉家時雨亭文庫蔵のいわゆる文永本だったとのちに判明⁽⁵⁾)の識語中に見える「九条内

大臣家」(九条基家と推定している)所蔵の「京極中納言入道真筆」本との関連をも考慮している。ただし岩佐美代子は後嵯峨院大納言典侍と九条左大臣女の事績について論じる中で、寿本のこの本奥書についても触れて、

谷山氏は断定を保留しつつも、一往この本と寛元当時九条内大臣(基家か)家に伝わっていた定家自筆本との関係を考えておられるが、これはおそらく九条家本とは別本であり、定家↓為家↓大納言典侍↓九条左大臣女という系路でか、又は定家から直接大納言典侍へ、或いは為家から直接九条左大臣女へという系路でか、要するに御子左家から母系を通して彼女に相伝せられたものであろう。

としている。⁽⁶⁾従うべき見解であると思われる。

ところで右奥書群のうちABは、前述の為相本にも備わっているものだった。具体的には次のようである。なお便宜上、寿本の本奥書に対応するものについては同じアルファベットに丸括弧を加え、対応しないものについては寿本と重ならないアルファベットを、同様に丸括弧を加えつつ付した。

(A) 承元三年六月十九日、書之、(B)同七月廿二日、依重勅定、被改直之、

(G) 以相伝秘本祖父卿、真筆、具書写校合了、

正安二年黄鐘下旬 右兵衛督為相

うち(A)(B)が寿本のABと一致する一方、(G)は正安二年(一二三〇)十一月下旬当時「右兵衛督」だった冷泉為相が、「祖父卿」定家真筆たる「相伝秘本」に基づき転写したと伝えるもので、これによってやはり定家筆の承元三年六月奥書本の実在したことが裏付けられる。しかしそうした場合、寿本の祖本たる定家筆本と、為相本の親本たる定家筆本とは自ずと同一伝本だったという可能性が生じてくることとなるが、しかし前者は西園寺家に伝わったとされ、後者はおそらくは為家を経て冷泉家の「相伝秘本」になっており、ここに両者同一伝本か、そうではなく別伝本と位置

づけるべきかという問題が生じてしまうわけである。ではこれをどのように考えればよいかについては、次の「後出歌」と関わらせながら述べていくこととしたい。

切り出し歌と後出歌

少なくとも、同じ承元三年六月の奥書を有した定家筆本を共通祖本としていたのであれば、寿本と為相本とは基本的には同系統本ということになる。しかしながら一方で、両者には非常に大きな違いが存する。ひとつは先に一言したように、撰者名注記が寿本にはあり為相本にはないということ。またひとつは真名序が、寿本では下帖の巻二十のあとに配されているのに対し、為相本では上帖の巻一の前に配されているということ。もうひとつはいわゆる切り出し歌の在り方が、寿本と為相本とで大きく異なっているということである。

切り出し歌とは、撰集過程の終盤あたりで除かれたとされているものであり、為相本では多くの場合「へ」という除棄記号と「これは（いつ、このような理由によつて）除かれた歌である」という注記とを伴いつつ、しかし実際には除かれないまま本本文中に残されている。為相本の資料的価値が極めて高いと評価されている大きな理由のひとつであつて、煩を厭わず掲げてみると、次の十七首がそうである。なお歌頭には1～17の通し番号を付し、歌末には『新編国歌大観』における位置情報を補った。

中納言家持

1 ふるさと承元四年九月止之に花はちりつゝみよしのゝ山のさくらはまたさかすけり（巻二・春下・一一〇次）
太神宮へに百首歌たてまつり侍し中に

太上^へ天皇

2 いか^へにせんよにふるな^へかめし^へはの^へとにうつろふ花の春のくれかた（同・一四六次）

顯昭^へ法師

3 ほと^へゝきすむかしを^{被出}かけてし^へのへとやおいのねさめにひとこゑ^へそする（卷三・夏・二二二次）

題^へしらす

赤染^へ衛門

4 さみ^へたれのそら^{被入雑上}たに^へすめる月かけにな^へみたの雨ははるゝまもなし（同・二三七次）

増基^へ法師

5 ほと^へゝきすは^{被出}なたち花のかはかりになくやむかし^へのなこりなるらん（同・二四四次）

太神宮^へにたてまつりし秋哥の中に

太上^へ天皇

6 あさ^へつゆのをかのかやはら山かせにみたれてものは秋そかなしき（卷四・秋上・二九八次）

宇治前関白太政大臣の家に七夕の心をよみ侍りけるに

宇治前関白太政大臣

7 契けん^へほとは^{入金葉集之由雅経朝臣申之}しらねと^へたなは^へたのたえせぬけふのあまのかは風（同・三一四次）

恵慶^へ法師

8 たかさこのおのへにたてるしかのねにことのほかにもぬるゝ袖かな（卷五・秋下・四四一次）

題^へしらす

和泉式部

9 たれなりとをくれさきたつほとあらはかたみにしのへ水くきのあと（卷八・哀傷・八一二次）

醍醐のみかとかくれ給てのころ人のもとにつかはしける

盛明親王

10 世中のはかなきことをみるころはねなくに夢の心ちこそすれ（同・八一四次）

躬恒

11 なみのうへにほにみえつゝゆくふねはうらふく風のしるへなりけり（卷十・羈旅・九〇四次）

除目のゝちかりのなきけるをきゝてよめる

躬恒

12 宮こにてはるをたにやはすくしえぬいつちかゝりのなきてゆくらん（卷十六・雑上・一四七五次）

題しらす

貫之

13 いくよへしいそへの松そむかしよりたちよるなみのかすはしるらん（卷十七・雑中・一六〇五次）

題しらす

能宣朝臣

14 みつくきのあとにのこれる玉の声いとゝもさむき秋の風哉（卷十八・雑下・一八〇一次）

題しらす

西行法師

15 ねかはくは花のしたにて春しなんそのきさらきのもち月の比（同・一八四五次）

奉幣使にてすみよしにまいりてむかしすみけるところのあれたりけるをみてよみ侍ける

津守有基

16 すみよしとおもひしやとはあれにけり神のしるしをまつとせしまに（卷十九・神祇・一九一三次）

依釈迦遺教念弥陀といふ心を 肥後

17をしへをきていりにし月のなかりせはにしに心をいかてかけまし（巻二十・釈教・一九七四次）
被出之

うち10には「へ」の除棄記号も注記も付されていないが、次述する寿本の「後出哥」に含まれており、おそらくは為相本における誤脱だろうとされている。⁽⁸⁾ 本論でもそれに従い切り出し歌の一首として扱っていく。ほか為相本には、みなせにて恋十五首哥合に夕恋といへる心を

摂政太政大臣

なにゆへと思もいれぬゆふへたにまちいてし物を山のはの月（巻十三・恋三・一一九八）

という一首もあり、同じ「へ」の除棄記号とおぼしきものが付されているが、1と17のそれとは明らかに記号のかたちを違えているため、右十七首とは別種とみておく。ただし別種にしても「へ」が付されている意味自体は考えていかねばなるまい。⁽⁹⁾

ともあれ、これら為相本の切り出し歌が、しかしながら寿本では本行本文からは除かれ、代わりに下帖末尾の本奥書のそのあとに「後出哥」として、**図版6**のように一括掲載されるかたちとなっている。これも全文を次に掲げる。なお便宜上、歌頭に為相本のそれに対応する通し番号を丸括弧を加えつつ付し、歌末に『新編国歌大観』番号を補った。翻刻の都合上、歌頭にまま施されている撰者名注記（さらに後述）はここでは略した。

後出哥

中納言家持

新古今二
承元四年九月止之
(1) 古郷に花はちりつゝみよしのゝ山の桜はまたさかすけり（一九七九）

太神宮に百首哥たてまつり侍し中に

太上天皇

(2) ^同いかにせむよにふるなめしはのにとうつろふ花の春のくれかた(一九八〇) ^{被出也}

顯昭法師

(3) ^{同三}ほとゝきすむかしをかけて忍とやおいのねさめにひとこゑそする(一九八一) ^{被出}

題しらす

赤染衛門

(4) ^同五月雨の空たにすめる月かけに涙の雨ははるゝまもなし(一九八二) ^{被出}

増基法師

(5) ^{同三}ほとゝきすはなたち花のかはかりになくやむかしのなこりなるらん(一九八三) ^{被出}

太神宮にたてまつりし秋哥の中に

太上天皇

(6) ^{同四}あさつゆのをかのかやはら山風にみたれて物は秋そかなしき(一九八四) ^{被出}

宇治前関白太政大臣の家に七夕の心をよみ侍りける

(7) ^同ちきりけんほとはしらねと七夕のたえせぬけふの天川かせ(一九八五) ^{入金集之由雅經朝臣申也}

惠慶法師

(8) ^{同五}高砂の尾上にたてる鹿のねにことの外にもぬるゝ袖かな(一九八六) ^{入金集之由云々}

題しらす

和泉式部

(9) ^{同八}たれなりとをくれさきたつほとあ ^{被出}らはかたみにしのへ水くきの跡(一九八七)

醍醐のみかとかくれ給てのころ人のもとにつかはしける

盛明親王

(10) 世中のはかなき事をみる比はねなく被出に夢の心ちこそすれ (一九八八)

躬恒

(11) なみのうへにほのにみえつゝゆく舟は浦吹かせのしるへなりけり (一九八九)

除目のゝちかりのなきけるをきゝてよめる

(12) 都同十六にて春をたにやはすくしえぬいつちかかきの鳴て行らん (一九九〇)

題しらす

貫之

(13) いくよへし磯同十七 入拾遺集之由権中納言源朝臣申之辺の松そ昔より立よる浪のかすはしるらむ (一九九二)

題しらす

能宣朝臣

(14) みつくきの跡に残れる玉のこゑいとゝもさむき秋の風哉 (一九九二)

題しらす

西行法師

(15) ねか同はくは花のしたにて春しなんその二月被出のもち月の比 (一九九三)

奉幣使にてすみよしにまいりてむかしすみけるところのあれたりけるをみてよみ

侍ける

津守有基

(16) すみよしとおもひしやはあれにけり神被出のしるしをまつとせしまに (一九九四)

依釈迦遺教念弥陀といふ心を 肥後

(17) をし同廿へをきていりにし月のなかりせは西に心被出をいかてかけまし (一九九五)

以上の切り出し歌十七首につき、では為相本と寿本のどちらが元の在り方だったのかと言えば、切り出し歌が本行本文中にある為相本のような在り方から、それらを一括後掲する寿本のような在り方への変更は容易であっても、その逆、つまりは寿本の後出歌に付されている「新古今二」「同三」といった限られた情報に基づいて、各歌を本来あった本行本文の位置に配し直すことは極めて困難、ほとんど不可能ではないかとみられる。そうした点、まず間違いない為相本のほうが元であり、それを後年、少なくとも右1及び(1)の注記に明記されている承元四年(一二一〇)九月以降のとある時点で、一括後掲というかたちで整理したのが、すなわち寿本だったとみられる。ちなみに寿本の「後出歌」なる見出しは「後に出だす歌」(あとになって除棄した歌)の意であろう。あるいは「末尾に取り出した歌」といった意と取れなくもないが、であれば「後」ではなく「奥」あたりにしたかと思われる。

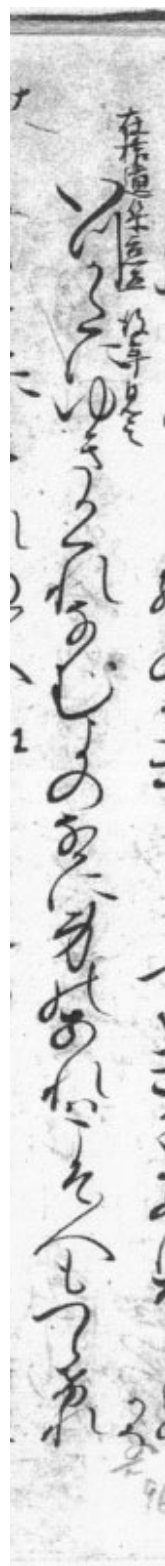
切り出し歌の整理

すると次に問題となるのは、誰が寿本のようなかたちに改めたのか、ということである。これに関わり頗る注目されるのが、為相本では何の注記も施されずに、ただ、

いつかたにゆきかくれなんよの中に身のあれはこそ人もつられけ (巻十五・恋五・一三六五)

とあるだけの一三六五番歌について、寿本では(図版7参照)、

在拾遺集恋五 後年見之
いつかたにゆきかくれなむよのなかに身のあれはこそ人もつられけ



のように、「在拾遺集恋五 後年見之」という独自の注記が施されていることであり、実際『拾遺集』に、

(題不知)

(読人不知)

いづ方にゆきかくれなん世の中に身のあればこそ人もつられ (巻十五・恋五・九三〇)

のように存するということである。この一首が『拾遺集』既出歌であること自体は、『新古今集』諸注でもすでに指摘されている。しかし寿本の一三六五番歌にこのような注記があったということについては、『新編国歌大観』の校訂本文だけからではもちろん知られず (こうした注記の類は活字化対象外とされているため)、旧蔵者・紹介者の谷山によっても言及されることがなかったようである。

しかしながら、これは極めて重要な注記であると思われる。すなわちこの「在『拾遺集』恋五、後年見之」という注記の前半は、後出歌のうち(7)の「入『金葉』之由、雅経朝臣申也」や、(8)の「入『金葉集』之由云々」、(13)の「入『拾遺集』之由、権中納言源朝臣申之」という注記 (また為相本の7813) と同種のものである。よって(1) (17)が仮に後出歌として一括後掲される以前に、すでに一三六五番歌についても勅撰集既出に気づかれ、注記も加えられていたのであれば、必ずや切り出し歌の十七首とともに後出歌の中に含められ、本行本文からは注記ともども除かれていたに違いなからう。しかし実際には寿本では右のとおり、まさに一三六五番歌として本行本文中に残されている。ではなぜ後出歌として扱われなかったのかと言え、問題の注記の後半に「後年見之」とあるのがその答えであろう。

つまりは為相本のように本行本文中にあった切り出し歌を、寿本のように一括後掲したさらにその「後年」になって、一三六五番歌の勅撰集既出が新たに知られたからだった、ということだろうと思われる。換言すれば、一三六五番歌の「在『拾遺集』恋五、後年見之」という注記は、切り出し歌を後出歌として一括後掲したあとでなければ施し得ないものだった、ということである。為相本の一三六五番歌にこの注記がないのも、そう考えてみればむしろ当然と納得されよう。

加えて述べれば、以上みてきたような記号や注記を施し得る人物として、最も想定しやすく、かつ最も相応しく思われるのは、後鳥羽院による切り出しの意向を最も把握していたはずの、『新古今集』撰集の直接関係者たちではなからうかと、やはり推察されてくる。また勅撰集既出状況にずっと注意を払い続けるような人物についても、おそらく同様のことが言えるのだろう。それについては、7及び(7)に「入『金葉集』之由、雅経朝臣申之」とあり、13及び(13)に「入『拾遺集』之由、権中納言源朝臣申之」(承元三、四年だと源通具が権中納言)とあるのも裏付けとなる。

そして寿本の祖本がほかならぬ定家筆本だったということ、ここであらためて考え合わせてみるならば、そもそも1、17及び(1)、(17)の記号や注記を施したのも、問題の一三六五番歌の『拾遺集』既出に気づいて追加注記を施したのも、すなわち定家自身だったと考えるのが、最も自然であり適切なものではなからうか。とするとまた、追加注記よりも以前に為されていたにほぼ間違いない、切り出し歌を後出歌として一括後掲したのもやはり、定家自身だったということに自ずとつながってくるのではなからうか。

ここで思い合われるのが、『古今集』定家本におけるいわゆる「墨滅歌」である。これは定家が主底本とした俊成本において、本行本文中に配されながらも墨滅符号が施された十一首が、定家によって「草子之面頗似狼藉^⑩」との理由により、本行本文から取り除かれた上、巻二十の巻末歌のあとに一括掲載されたというものである。このような定

家の所為が確かにあったということからすると、寿本における「後出歌」も定家の所為として十分にあり得るものだったと思われる。

繰り返しとなるが、為相本なり寿本なりに見られるような、とりわけ切り出し歌に関する記号なり注記なりは、実際に撰集作業に携わっていた人物以外には、なかなか施せるようなものではなかったはずである。そうした点と、為相本と寿本とがともに、承元三年六月奥書を有した定家筆本に基づいている点とを考え合わせてみるならば、それらの所為が定家によって為された可能性は相当に高いと思われる。すでに田淵氏も、為相本に基づきながら「このような記号や注記に見られる入集の結果に対する厳密な態度は、勅撰集の撰者・歌道家で作成・書写された本にふさわしいものであり」、「撰者でなくては知り得ない記述は、恐らくは定家自身が原本に書き加えたもので、それを忠実に書写したものと考えてよいであろう」と指摘している。以上の考察結果からしても、確かに首肯されるのである。

まとめてみると、おおよそ次のように経緯を推定できるのではなからうか。

- ・まず大もとの伝本として本奥書 A B 及び (A) (B) の承元三年六月十九日奥書本があった。
- ・ただ同日の時点では切り出し等の指示は出されておらず、勅撰集既出などにも特に気づかれてはいなかったため、切り出しの記号や注記も当然施されてはいなかった。
- ・ところが後鳥羽院からの切り出し等の意向や、撰集関係者からの勅撰集既出の情報等が少なからず伝えられるようになってきた。
- ・そうした中で、定家はのちに切り出し歌となる十七首をいまだ本行に含んだままの本文を持つ、承元三年六月奥書本を用いつつ、そこに切り出し歌に関する情報を記号や注記のかたちで書き加えていった。
- ・時期としては、切り出し歌の 1 及び (1) は承元四年九月と特定され、それ以外は奥書 B の伝える承元三年七月

二十二日から、同四年九月までの間となろうか。

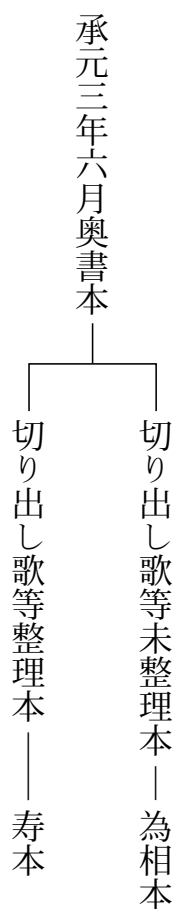
- ・結果、1～17の切り出し歌に記号や注記を施し終わった、そのような定家筆の一本が、のちに為相の相伝するところとなり、為相本の親本ともなった。

- ・一方で定家は別途、十七首の切り出し歌を一括後掲し、真名序の位置も巻一の前から巻二十のあとに（理由は不明ながら）変更するなどの、本行本文を言わば整理した別の一本を作成していた。

- ・ところがその別の一本を作成し終えたのち、新たに勅撰集既出歌の存在が判明したため、同本の本行本文中のその一三六五番歌に注記を追加することとなった。

- ・こうした定家筆の別の一本が、のちに後嵯峨院大納言典侍や九条左大臣女などの相伝するところとなり、寿本の祖本ともなった。

単純化させた伝本派生図として示してみれば、



のようになる。「未整理本」「整理本」というのはまったくこなれていないけれども、仮にこう呼んでおく。事実このようであったとすれば、同じく承元三年六月奥書を持つ定家筆本が、冷泉家と大納言典侍らとの双方に伝わっていたという、一見明らかに齟齬する問題についても、要するに承元三年六月奥書本をさらに定家自身が分岐させていて、そうして生じた最低二本が別経路で伝わっていったからだということで、ひとまずの説明はつけられるのではなからうか。

もつとも一点、寿本において、これら後出歌が本奥書A～Fのそのあとに配されているという在り方に対し、いささかの違和感は覚えてもしまふ。この配置だと、寿本の（抹消されている）奥書もしくは識語のFが某人によって記されたさらにあと、少なくともDの元応元年以降の某人によって、初めて切り出し歌が一括後掲されたようにも見えるからである。しかしながらよくよく考えてみるに、定家自身の段階では、寿本の本奥書のうちABしかない状態だったわけであるため、定家としてはとりわけBの「依重 勅定、被改直之」とあるその具体的な内容を示すことをも果たそうとして、意図的にBに続けて「後出哥」を掲げたという可能性は、相応にあり得るのではとも思われる。かつそうして作成された「定家整理本」が、のちに転写・転々写されていく際、親本・祖本の本奥書たるABに書き連ねるかたちで、つまりは既存の本奥書と後出歌との間に、結果的に挿入されたと見えるようなかたちで、新たな奥書を継ぎ足していく場合もまた、あり得ないことではないかと思われた。いささか恣意的な判断に過ぎるだろうかと懼れながらもいるが、いかがであろうか。

切り出し歌に関する異同

それともうひとつ触れておくべきは、ひとまず為相本と寿本との間に限るが、切り出し歌の本文や記号、注記にくつかの異同が存することである。

2 ナシ（為相）——被出也（寿）

4 被入雑上了（為相）——被出了（寿）

6 ナシ（為相）——被出了（寿）

7 よみ侍りけるに（為相）―よみ侍りける（寿）／宇治前関白太政大臣（為相）―ナシ（寿）／金葉集（為相）―

金葉（寿）／申之（為相）―申也（寿）

8 ナシ（為相）―入金葉集之由云々（寿）

9 ナシ（為相）―被出了（寿）

10 ナシ（為相）―被出了（寿）

11 被出之（為相）―被出了（寿）

12 躬恒（為相）―ナシ（寿）

14 被出之（為相）―被出了（寿）

15 被出之（為相）―被出了（寿）

16 被出之（為相）―被出了（寿）

17 被出之（為相）―被出了（寿）

これらの異同の多くについて、一見いずれかにおける誤写・誤脱・本文転訛の類のようにも受け取られてしまうが、実はそう単純でもないことその他、別途詳しく考察しなければならないものの、今はひとまず4の為相本「被入雑上了」に対しての、寿本「被出了」という注記の異同に注目したい。すなわち4の（記号・注記を省いて再掲）、

題しらす

赤染衛門

さみたれのそらたにすめる月かけになみたの雨ははるゝまもなし（同・二三七次）

という一首に関し、為相本では卷三・夏の二三七番歌の次の位置から、卷十六・雑上に移されたとする一方で、寿本のほうでは、歌そのものが切り出されたとしているのである。興味深いのはこの一首が実際、『日本古典文学大系』（以

下「旧大系」底本のいわゆる小宮本において、為相本が伝えたとおり、一四八九番歌（旧大系番号）として卷十六・雑上に配されているということである。⁽¹²⁾ 必ずや為相本の注記と関連してくるだろうが、ともあれ当面問題となるのは、為相本と寿本との間の齟齬である。しかしこれも要するに、為相本の親本となった「定家未整理本」の段階では、二三七番歌は秋上から雑上に配し直されることになっており、実際小宮本のように配し直された本文が作られもしたが、寿本の親本はさらにそれ以降の段階の「定家整理本」であつたため、歌自体が卷三から、当初の移行先だった卷十六からも切り出される結果になったということ、一応の辻褄は合いそうである。

もともと、とすると小宮本は、自ずと為相本Ⅱ「定家未整理本」から、寿本Ⅱ「定家整理本」へと移行する、その中間に位置する本文だったということにもなってしまう。本当にそれは適切な把握であるのか、もしそのようにみるならば、切り出し歌に関しての、異なる記号や注記を伴った定家筆本がさらに複数種存在していたことにもなりかねない。もともと関連諸資料を突き合わせてみると、むしろそうと捉えたほうが理解しやすいところもあって、正直なところ論者自身もきちんと整理を付けられていない。加えて小宮本の現存先明確ではなく、ほかに唐招提寺蔵伝正徹筆本その他関連伝本の実地調査をも果たしていないといった、現実的な事情などもある。ついてはまずは本論で途上ながらも以上のような私見を提示し、専門諸氏のご意見を参考にした上で、今後いつそう詳細に検討したい、その必要が大いにあると考えている次第である。

撰者名注記

あとひとつだけ取り上げたいのが、寿本に施されている撰者名注記に関することである。既述のとおり論者としては、これらの撰者名注記は本文と同筆の可能性が高いとみている。その場合、すでに寿本の親本（以前）にあった撰者名注記をそのまま転写したという可能性と、親本にはなかった撰者名注記を、寿本の筆者自身が、のちに他本から転記したという可能性とが生じてこよう。また前者だったとしても、親本（以前）の段階で、やはりそもそもはなかったものが、他本から転記されたものだった可能性もまた存するだろう。

しかしながら、こと寿本に関しては、この撰者名注記が巻一～二十の全巻にわたり施されているばかりでなく、谷山もひと言ながら「『後出歌』にも撰者名が記入されている」と述べている点に注目すべきかと思われる。実際前掲の図版6などからも明らかのように、これまで縷々考察してきた後出歌の十七首中の多くの歌にも、同様に撰者名注記が施されている。あらためて示せば次のとおり（略字は元の漢字に直す）。

- | | | | | | | | |
|-----------|--------|-----------------|---------|-------|------------|--------|------------------|
| (3) 衛（通具） | (5) 衛 | (7) 有（有家）・隆（家隆） | (8) 有・隆 | (9) 衛 | (12) 雅（雅経） | (13) 隆 | (15) 有・定（定家）・隆・雅 |
| (16) 雅 | (17) 隆 | | | | | | |

さてこれらについて考えてみたいのは、もし寿本なりその親本（以前）なりの撰者名注記が、他本から転記されたものだったとすると、巻一～二十についてはともかく、後出歌の都合十首に付された右のような撰者名注記については、果たして一体どのような伝本から転記可能であったのだろうか、ということである。

撰者名注記については、後藤重郎によってまとめられた「撰者名注記一覧表」という大変な労作がある。¹⁴ もっとも

同一覧では後出歌は対象外とされているのだが、一覧末尾に「注記」するかたちで、一部の諸本に含まれる後出歌においての「撰者名注記」の有無に関する調査結果がまとめられている。今わかりやすいように、略称で示されている諸本の名称を修訂明記し、後藤が基づいた『新編国歌大観』番号の前に本論で用いた(1)～(17)の各番号を付け加え、かつ伝本別ではなく歌別にまとめ直すと、おおよそ次のようになる。

(1) 一九七九 撰者名注記ナシ…後藤重郎旧蔵（国文学研究資料館懷風弄月文庫現蔵か）一本（以下「後藤一本」）

(3) 一九八一 撰者名注記ナシ…後藤一本

(4) 一九八二 撰者名注記ナシ…後藤一本

(5) 一九八三 撰者名注記「通」…後藤一本

(9) 一九八七 撰者名注記「通」…後藤一本

(10) 一九八八 撰者名注記ナシ…後藤一本

(11) 一九八九 撰者名注記ナシ…後藤一本

(14) 一九九二 撰者名注記ナシ…後藤一本・坂上本・永享三年本・愛知県立大学蔵八代集抄本・静嘉堂文庫蔵八代集

抄本・久曾神昇旧蔵（関西大学図書館現蔵）北山切本・穂久邇文庫蔵伝二条為氏筆本・国文研初雁

文庫本

(16) 一九九四 撰者名注記「雅」…久曾神昇旧蔵（関西大学図書館現蔵）北山切本

撰者名注記ナシ…後藤一本・坂上本・永享三年本・愛知県立大学蔵八代集抄本・静嘉堂文庫蔵八代集

抄本・穂久邇文庫蔵伝二条為氏筆本・国文研初雁文庫本

うち(1)(4)(10)(11)(14)は、寿本でも同様に撰者名注記自体がないので特に問題とならないが、(3)は寿本「衛」に対して

他本ナシ、(5)(9)は寿本「衛」に対して後藤一本は「通」と異同あり、(9)は寿本・後藤一本ともに「通」、(16)は寿本・他一本ともに「雅」となっている。一方で後藤のまとめの中には示されていないかったため、右でも掲出し得なかったが、寿本に存する(7)「有」・(8)「有隆」・(12)「雅」・(13)「隆」・(15)「有定隆雅」・(17)「隆」という撰者名注記は、少なくとも後藤の調査範囲内では他本いずれもナシであったと判断される。

つまりは若干は一致しつつもほとんどは一致していない、という結果が得られるわけである。ただし後藤のまとめには、例えば烏丸本上帖の本行本文中に存する切り出し歌1～10はなぜか含まれていないのだが、同本では3に該当する一首に限り「―」(通具を示す記号)が施されていて寿本と一致する。こうした事例などがある以上、再精査の必要性をも痛感するが――並大抵の作業量ではなく臆してしまうが――、ひとまず後藤の右のまとめからでも類推するに、

- ・ 寿本の後出歌中の十首にまでも、撰者名注記を転記できるような他の伝本がかつて本当に存しており、
- ・ それが偶々寿本の筆者なり、その親本(以前)の筆者なりの眼にするとところとなって、首尾よく撰者名注記の転記が為されることとなった、

というような機会が実際問題としてあり得たかどうか、いささか考えにくいようにも思えてしまう。

もちろんかつては多様な伝本がもつと伝存していたに違いなく、よって何とも言えないところであるものの、ひとつの可能性として右述のように、後出歌の撰者名注記を他本から転記するのがなかなか困難だったとするならば、自ずと寿本の巻一～二十のそれらについても同様に、果たして他本から転記されてきた・され得たものだったのかどうか、どうだろうかと思われる。

かつこのような撰者名注記というものが、先に論じた切り出し歌と同様に、そもそも誰によって施され得たかと考

えてみるに、それはやはり撰集過程を熟知している撰集関係者だったとなりそうである。加えてこの寿本の祖本が、重ねてとなるが『新古今集』撰者の中でも中心的存在だった、定家の手に成る「定家整理本」だったとみられることを考え合わせてみるならば、切り出し歌に関する場合と同じ論理で、これらの撰者名注記を施したのも、実はほかならぬ定家自身であったという可能性が生じてくるのではなからうか。もしこの見方が相応に支持を得られるならば、諸本間で異同の存する撰者名注記に関しては、この寿本のそれをひとつの基準として今後分析していけるようにもなっていくのではなからうか。

もとより撰者名注記をめぐる諸問題に関しては、先学による大変な研究の蓄積があり、長きにわたるさまざまな観点からの議論がある。⁽¹⁵⁾ 本来であればそれらを丁寧に踏まえて適切に引用しながら述べていくべきところであるが、しかしながら従来説の大前提となり根幹を為してきた、『新古今集』諸本の性格や性質の把握自体に、実のところ種々の誤認がこれまでであったように思えてならない。⁽¹⁶⁾ ついては今回せつかく得られた機会でもあるので、試みに寿本に基づくかたちで、同本が実は特有しながら、これまでおそらく指摘されてこなかった徴証を拾い上げ、そこから導き出し得る一可能性を私見として提示してみた次第である。重ねてのご批正を賜りたいと考えている。

翻刻の必要性

そのほか寿本にある撰者名注記が為相本にないのはなぜかとか、本論に先立ち紹介した伝定家筆『新古今集』断簡が、為相本Ⅱ「定家未整理本」と寿本Ⅱ「定家整理本」のいずれとより直接的な関係にあるのかとか、現時点では保留とせざるを得ない問題も少なからず残されており、今後も調査研究を進めていきたい。

締め括りとして、寿本を底本とした『新編国歌大観』解題をあらためて確認すると、

底本は虫損のため一部不明の箇所のあることは惜しまれるが、それらを含め、校訂本により改訂補正を行った箇所は別記のごとくである。

(略)

(校訂本文)

(底本本文)

一五七詞書 百首歌たてまつりし時

ナシ

七五〇作者 前中納言匡房

中納言匡房

一〇九四詞書 和歌所歌合に、忍恋の心を ナシ

一一二六作者 摂政太政大臣 歌の次に記されているのを、歌の前へ

一九五〇作者 前大僧正慈円 前僧正慈円

のように記されている。これに拠る限り、寿本の本文のほとんどに校訂が加えられずに活字化されたものと思えてしまうが、実際に見較べてみると、既述のとおり寿本には虫損・破損による判読困難部分が少なからず存しており、おそらくそれらについては、校合に用いたという為相本その他の伝本などが参照されつつ校訂されていたものとみられる。ほか寿本にある他本注記等の書き入れ類が省略されていたり、撰者名注記が解題のほうで一括掲出されていて、それ自体は大変に良心的な措置と思われるながらも、実際には各歌との対応関係を把握しにくくなっていたりすることもあり、寿本に備わる多大な文献資料的価値がなお十全に活かされていない校訂本文となっている、と言わざるを得ない。

については寿本の原文に能う限り忠実に、虫損部分もそうと明示し、撰者名注記をも歌頭に掲げ、さらにおそらくは

最も近い関係にある為相本の本文をも同時に確認できるようなかたちでの、寿本の翻刻があらためて行われ公にされ、広く活用されるようになることが望ましく、今後検討し具体化していければと思う。

〈注〉

- (1) 谷山茂「寿本新古今和歌集」(『谷山茂著作集五 新古今集とその歌人』所収、一九八三年十二月、角川書店)。以下谷山の説は同論に拠る。
- (2) 『新古今和歌集 為相本』(久保田淳氏解題、一九八〇年四月、ほるぷ出版)。
- (3) 『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書 文学篇 第四卷(勅撰集 四)』所収(田渕句美子氏解題、二〇〇〇年十月、臨川書店)。以下田渕氏の説は同論に拠る。
- (4) 寿本また為相本とが、定家の手に成る写本に由来する可能性の極めて高いことについては、拙論「伝藤原定家筆『新古今和歌集』断簡」(『語文』第百七十輯、二〇二五年一月)でも指摘した。
- (5) 『冷泉家時雨亭叢書 第五卷 新古今和歌集 文永本』(赤瀬信吾解題、二〇〇〇年四月、朝日新聞社)。
- (6) 岩佐美代子「九条左大臣女とその母後嵯峨院大納言典侍」(『京極派歌人の研究〔改訂新装版〕』所収、二〇〇七年十二月、笠間書院)。
- (7) この注記をも忠実に再現した為相本の転写本が、石津一六・小島吉雄旧蔵のいわゆる石津本であるが、現在所在不明となっている。和歌文学会二〇二四年七月例会(於日本大学文学部)での口頭発表『新古今和歌集』承元三年六月十九日奥書本と伝藤原定家筆断簡——基準本文の設定と整理に関する提案——」でも言及したが(今後論文化する予定)、為相本の補写部分の復元におそらく不可欠となる重要な伝本であり、その再出現を切望している。

(8) 注(2) 久保田氏解題など。

(9) この(18)に付された除棄記号につき、田渕氏は「本書の誤りである可能性が高いと推定される」としているが、誤りが生じる原因や理由がどうにも判然としない。

(10) 『古今集』定家本の一、貞応元年(一二三二)六月一日奥書本の本奥書。本文は飛鳥井雅縁『諸雜記』(浜口博章『中世和歌の研究 資料と考証』において翻刻、一九九〇年三月、新典社)に拠りつつ、ほぼ通行の字体に改め、私に読点を施している。

(11) 都合十七首の切り出し歌の一部を有し、かつそれらに関して切り出しの記号や注記をも有する、天理大学附属天理図書館蔵のいわゆる烏丸本や、尊経閣文庫蔵のいわゆる前田家本、唐招提寺蔵の伝正徹筆本などの間にも、複雑な異同が確認されるのである。

(12) 後藤重郎「異本所収歌・歌順異同一覧表」(『新古今和歌集の基礎的研究』所収、一九六八年三月、塙書房)を活用。

(13) あるいは「定家未整理本」の段階における切り出し歌の注記に基づき、後人によって本文が別途整理されたのが小宮本(の親本・祖本)であったのか、などとも推察されてくるが、仮にその場合でも、4の注記に拠るばかりでは、巻十六・雑上のどの位置に実際に配すればよいか、という判断までは付けられないはずである。

(14) 後藤重郎「撰者名注記一覧表」(『新古今和歌集研究』所収、二〇〇四年二月、風間書房)。その前段階のものとして、同「撰者名注記一覧表」(『新古今和歌集の基礎的研究』所収)もある。

(15) 後藤重郎「撰者名注記研究史概観」「撰者名注記を有する諸本」「撰者名注記に関する諸問題」(『新古今和歌集の基礎的研究』所収)などを参照。

(16) 注(7)の口頭発表においてその一端を指摘した。

【付記】 寿本の実地調査及び學術利用に際し、京都女子大学図書館に大変にお世話になった。また京都女子大学の小山順子氏をはじめとする研究者諸氏にも望外のご高配を賜った。加えて京都女子大学には二〇二四年度私学研修員として受け入れていただいた。これらの全てに対し、記して深謝申し上げる次第である。なお本論は、二〇一九～二〇二三年度（二〇二四年度延長）日本學術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）「中古中世仮名文学の本文資料に関する多様性の再評価を目指した文献学的研究」（課題番号 19K00304、研究代表者久保木）に基づく研究成果の一部である。

（日本大学教授）